

RANGA

-現代美術の日本画-

江戸時代後期、未だ鎖国下の日本で洋画法を学んだ絵師により、新しい絵画が生み出された。従来の日本絵の具を用いた東洋画法を基に西洋画の陰影法や遠近法が巧みに取り入れられたその画風を「秋田蘭画」という。江戸の新興文化である蘭画から獲得した、それまでの絵画にはないリアリスティックな表現は、日本美術史上での大きな出来事となった。

現在では当たり前のように絵画の区分して「日本画」「洋画」という言葉を用いているが、感覚や美意識、表現などが時代とともに様々に変化している中で、果たしてそのような区分は有効なのだろうか？「日本画」という言葉は、明治以降に西洋からの油彩画と区別されるために生まれた言葉である。使用する素材の違いによって両者を区別する場合もあるが、この言葉が実際に使われる契機となったのは、明治15年(1882年)に「龍池会」でフェノロサが行った『美術真説』という講演であった。この講演では次の5点が日本画の特徴とされた。1. 写真のような写実を追わない。2. 陰影が無い。3. 輪郭線がある。4. 色調が濃厚でない。5. 表現が簡潔である。確かに日本画の特徴を明確に捉えた要素ではあるが、様々な形で生み出され続ける作品はそういった枠組みやジャンルで一概に捉えることを許さなかった。だからこそ、新しい創造や可能性が生まれてきたのだろう。時代におけるそれぞれの技術や感覚が組み合わせられてきた新しい作品。蘭画もその時代の最先端のアートだったのかもしれない。

様々な画材を用いた日本画的作品、日本画家の新しい試み、海外作家・現代美術作家の日本画手法による表現。今回は、現代と日本画の関係を提示する現代の蘭画、新たな日本画的世界を紹介する。日本画の世界とその潮流を各世代の作家の作品を通して鑑賞する機会を提供する。

フォーエバー現代美術館
チーフキュレーター 加藤 淳